

2020 年度名古屋大学学生論文コンテスト

佳作受賞

部活動の所属と学業成績の関連性についての分析

経済学部1年 守内 優斗

部活動の所属と学業成績の関連性についての分析

1. はじめに

いまや学校生活を送る上で一度は部活動に所属することはごく一般的なことだ。スポーツ庁(2018)によると運動部、文化部など何らかの部活動に一つ以上、所属している中学生の割合は全国平均で約90%、高校生では約80%であった。そのことから多くの方は部活を途中でやめる場合もあったとしても、中学と高校のいずれかで、一度は部活動に所属していることが分かる。そんな学校生活の中心を担うものの一つである部活動だが、それについて、よく話題になるのが部活と受験に関するものである。「部活を早くやめて勉強に専念したほうが良い。」という意見や、逆に「部活を最後まで続けた人の方が今まで受験で良い結果を残してきた。」という意見など、部活を続けることに肯定する意見と反対する意見の両方とも耳にする機会は多いだろう。

そこから、部活を最後まで続けた人の方が部活動に所属しなかった人や途中でやめた人より学業成績を伸ばせるのか、もし、部活動が学業成績にポジティブな影響を与えるなら、部活動に所属していた人の学業成績に関するどのような能力を育んだのか、そして、それら学業成績の伸びや、部活動が育む学業成績に関する能力は、部活動の種類によって差はあるのかについて調査することにした。本論文では学業成績として受験に関する学力に近い、大学入学共通テストの模擬試験(マーク式)の全国偏差値を採用した。

2. 先行研究

今回行った調査について述べる前に、先行研究から部活動が与える効果について考察する。関・溝上(2018)は過去の部活動の研究から以下の二点が示唆出来るとした。

- ① 運動部と文化部には違いがあること
- ② 運動部は文化部よりもポジティブな影響があること

これらを「運動部優位説」として、社会人基礎力、その中でも特に「チームで働く力」に着目して検証した。そして検証の結果、「チームで働く力」を含む社会人基礎力の全ての項目で運動部は文化部よりも有意に高いことを確認した。部活動に所属しない「無所属」と「運動部」の間では有意な差を認めることができなかったが、このことからポジティブな影響を多く与える運動部では、学業成績にもポジティブな影響が与えられることが期待できる。

今回の調査では「運動部」と「文化部」と「無所属もしくは途中退部者」に分けるだけでなくその部活の性質から「チーム競技」か「その他」という尺度も加えてそれぞれの学業成績の伸びを中心に分析する。

3. 調査の方法と結果

3.1 調査の方法

今回の研究における調査では、愛知県のある県立高校(以下 A 高校)の 3 年生を対象に男女問わずアンケート調査を行い、333 人分の有効回答を得られた。

アンケートでは部活動に最後まで所属していたかどうか、所属していた場合、その部活動は何であったか、直近の模試(10 月実施)の全国偏差値は何であったか、その一つ前の模試(9 月実施)の全国偏差値は何であったかなどを尋ねた。そしてそれだけでなく部活動が学業成績に関するどのような能力を育んだのかを把握するため、大学入試に対するモチベーションは人と比べて高いか、集中・持続力は人と比べて高いか、思考・判断力は人と比べて高いか、計画性は人と比べて高いか、規則的な生活を送れているか、休日の一日の学習時間はどのくらいかを尋ねた。学業成績に関する能力等に関する質問(ただし学習時間の質問以外)は

1. そう思わない
2. あまりそう思わない
3. ややそう思う
4. そう思う

の四件法を採用した。学習時間の質問は

1. 2 時間未満
2. 2~4 時間
3. 4~6 時間
4. 6~8 時間
5. 8 時間以上

の五件法を採用した。

そして得られたデータを①部活動に最後まで所属していたかどうか、②最後まで部活動所属していた場合それは運動部であったか文化部であったか、③最後まで部活動に所属していた場合、それはチーム競技であったかどうか、という基準で分析する。

3.2 学業成績に関する能力等の調査項目選定の背景

今回の調査で部活動が学業成績に関するどのような能力を育んだのかを把握するために用意した調査項目はどれもその項目について優れているほど学習成績が良いと考えられるものである。前節であげた学業成績に関するどのような能力を育んだのかを把握するための質問で調査する項目を改めて端的に表すと

- ① モチベーション②集中・持続力③思考・判断力④計画性⑤規則的な生活習慣⑥学習時間
- である。

それぞれが優れているほど学習成績が良いと考え、採用した根拠は以下の通りである。

- ① モチベーションー坪田・廣部・市波(2010)の入学試験時の選抜方法および成績と国家試験結果との相関分析によると、入学時の成績に関係なくモチベーションを高めるような教育支援が出来れば、国家試験の成績を伸ばすことが可能であることが示唆された。
- ② 集中・持続力ー杉村・清水(1988)の中学生の学習意欲と学業成績の関係の調査によると集中力が男女ともに成績上位群の方が下位群よりも有意に高かった。(今回の調査では持続力も集中力と似通ったものとしてあわせて集中・持続力とした。)
- ③ 思考・判断力ーこれは学校教育法によって定められている学校教育において重視すべき三要素の一つである思考力・判断力・表現力等の一部であるため、この能力の優秀性は学習成績の良さに繋がると考えた。

- ④ 計画性－堀本・丸山・黒澤(2011)の理学療法士養成校生を対象にした調査で進級群が非進級群に対して「計画性のある」の項目が有意に高かったことが示された。
- ⑤ 規則的な生活習慣－福田・浅岡(2012)が大学生における睡眠覚醒リズムの問題点について検討した後に就寝時間が遅いグループは、早いグループと比較して学業成績が悪い傾向であったことを示した。
- ⑥ 学習時間－ベネッセ教育総合研究所(2006)の調査によって成績上位層の方が家庭での学習時間が長いことが示された。

以上のものは今回の調査の対象である高校生ではないため、高校生が対象の場合と多少相関関係の強弱に差があるかもしれないが、少なくともどの項目も学業成績と正の相関関係は持っていることは推測できる。

3.3 調査結果

調査結果は以下の通りである。質問項目について下の表では簡略化して記載する。

表1 部活の所属に関するデータ

	最後まで所属	無所属か途中退部	総計
部活の所属	276人	57人	333人

表2 部活の系統に関するデータ①

	運動部	文化部	総計
運動部か文化部か	197人	79人	276人

表3 部活の系統に関するデータ②

	チーム競技	その他	総計
チーム競技かどうか	127人	149人	276人

表4 模試の偏差値に関するデータ

	平均	分散	標準偏差
先(9月)の模試の偏差値	54.522	32.769	5.724
後(10月)の模試の偏差値	55.284	38.286	6.217

表5 学業成績に関する能力等についてのデータ①

	そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う	総計
高いモチベーション	42人	157人	114人	20人	333人
集中力等が高い	58人	170人	84人	21人	333人
思考力等が高い	38人	162人	105人	28人	333人
計画性が高い	85人	155人	75人	18人	333人
生活習慣が規則的	56人	100人	119人	58人	333人

表6 学業成績に関する能力等についてのデータ②

	2時間未満	2～4時間	4～6時間	6～8時間	8時間以上	無回答	総計
学習時間	5人	29人	74人	105人	99人	21人	333人

今回調査を行ったA高校の部活の分類は以下のようにした。

表7 部活動の分類

運動部		文化部	
チーム競技	その他	チーム競技	その他
野球部 サッカー部 バレーボール部 バスケットボール部 ハンドボール部 新体操部 計 89人	水泳部 陸上部 卓球部 弓道部 ソフトテニス部 剣道部 柔道部 計 108人	合唱部 吹奏楽部 計 38人	茶華道部 自然科学部 生活科学部 美術部 書道部 パソコン部 計 41人

4. 調査結果に対する分析

4.1 模試の偏差値に関する分析

この節では二回の模試の偏差値の変化を①部活動に最後まで所属していたかどうか、②最後まで部活動所属していた場合それは運動部であったか文化部であったか、③最後まで部活動に所属していた場合、それはチーム競技であったかどうか、の基準で分析する。それぞれの基準ごとに比較したグラフは次の通りである。

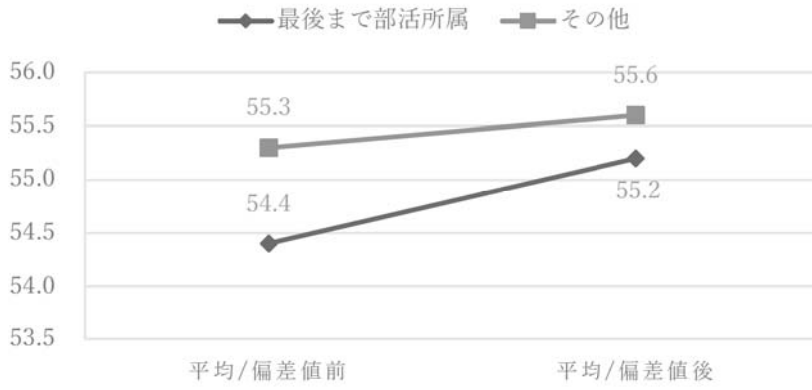


図1 部活に最後まで所属したかを基準に分類した偏差値

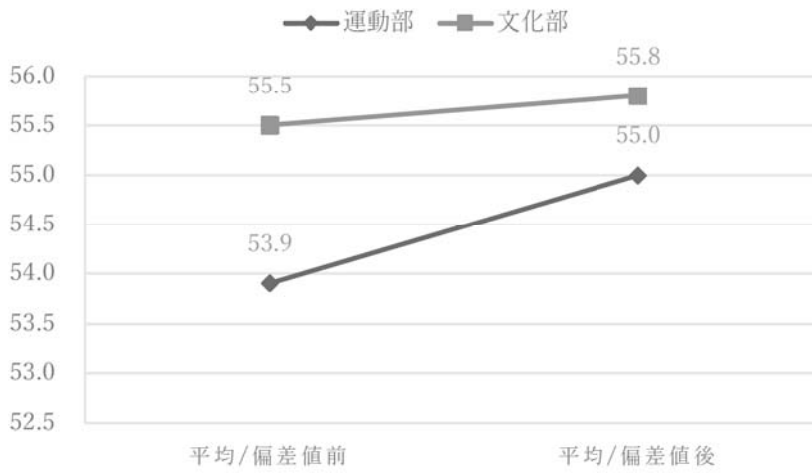


図2 運動部か文化部を基準に分類した偏差値

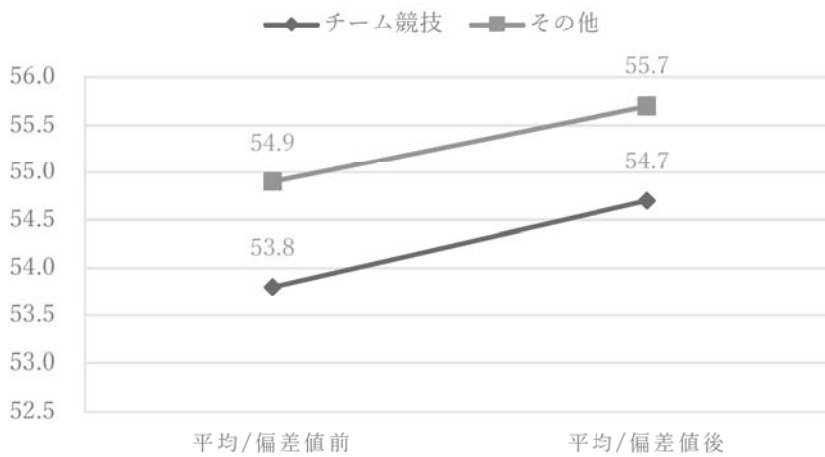


図3 部活をチーム競技かどうかを基準に分類した偏差値

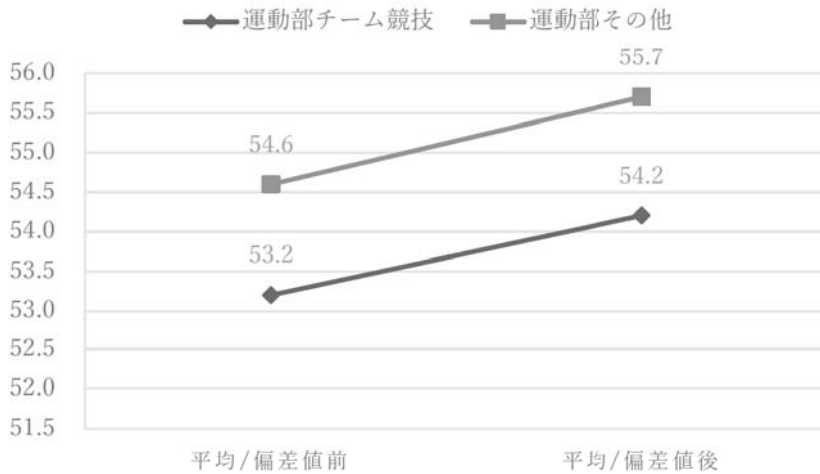


図4 運動部においてチーム競技かどうかを基準に分類した偏差値

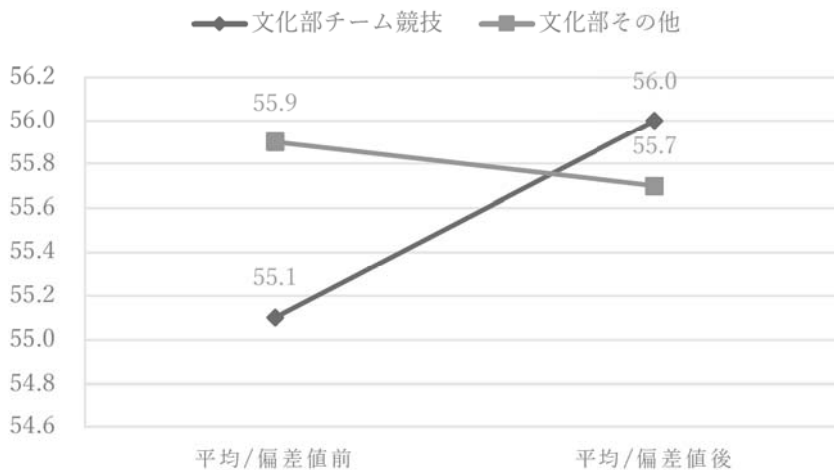


図5 文化部においてチーム競技かどうかを基準に分類した偏差値

まず、図1、図2より偏差値の伸びは、運動部、文化部、無所属または途中退部者の順に大きいことが読み取れる。このことから部活動の所属は学業成績の伸びにポジティブな影響を与えることが推測できる。しかし偏差値の高さの場合、無所属または途中退部者、文化部、運動部の順になってしまっている。今回得られたデータからその理由として挙げられるものが二つあり、一つ目が無所属または途中退部者の中に他の生徒よりも極端に偏差値が高い生徒が複数人いて、無所属または途中退部者の偏差値を大きく引き上げたことだ。二つ目が運動部の中で部活の引退時期が他の部活よりもさらに遅かった野球部などが、偏差値が低い傾向にあったことだ。

次に、偏差値の伸びを部活動の中で、チーム競技かどうかという基準で分析する。図3、図4、図5より部活動全体や、運動部の中ではチーム競技かどうかという基準では差はほとんど見られないが、文化部の中ではチーム競技の部活動は偏差値を伸ばしたが、その他の部活で

は低下するという結果になった。チーム競技の文化部は吹奏楽部と合唱部であるが、この二つは今回調査した A 高校の中で他の文化部の部活動より比較的練習が厳しく盛んな部活動であり、性質が文化部の中でも運動部よりのものである。部活動全体や運動部の中ではチーム競技かどうかという基準では差がほとんど見られなかったことから、その性質が今回の結果をもたらした可能性が考えられる。

4.2 学業成績に関する能力等に関する分析

この節では学業成績に関する能力等に関して、前節と同じ基準で分析する。その際、設問に対する回答を、学習時間の質問以外は

そう思わない→1 あまりそう思わない→2 ややそう思う→3 そう思う→4

学習時間の質問は

2時間未満→1 2～4時間→2 4～6時間→3 6～8時間→4 8時間以上→5

という形で数字を対応させて平均値をとり、前節で偏差値の伸びに差があった、部活動に最後まで所属したかどうか、運動部か文化部か、文化部におけるチーム競技かどうか、の三つの基準で比較し、どの要素に差があったか分析する。なお質問項目について下の表では簡略化して記載する。

表 8 部活に最後まで所属したかを基準に分類した学業成績に関する能力等の平均値

	モチベーション	集中力等	思考力等	計画性	生活習慣	学習時間
最後まで部活動に所属	2.34	2.19	2.36	2.08	2.60	3.89
その他	2.30	2.26	2.40	2.07	2.25	3.63

表 9 運動部か文化部を基準に分類した学業成績に関する能力等の平均値

	モチベーション	集中力等	思考力等	計画性	生活習慣	学習時間
運動部	2.40	2.28	2.41	2.17	2.63	4.00
文化部	2.26	2.03	2.17	1.86	2.51	3.69

表 10 文化部においてチーム競技かどうかを基準に分類した学業成績に関する能力等の平均値

	モチベーション	集中力等	思考力等	計画性	生活習慣	学習時間
文化部チーム競技	2.37	2.11	2.34	2.00	2.58	3.78
文化部その他	2.15	1.95	2.02	1.73	2.44	3.60

表 8 より、部活に最後まで所属したかどうかの比較では生活習慣と学習時間の項目で最後まで部活動に所属していた群の方が大きいことが読み取れる。他の項目では差はあまりなく、集中力等と思考力等の項目では差はほとんど無いが、部活に最後まで所属していなかった群の方が大きかった。表 9、表 10 による運動部と文化部の比較、文化部の中で、チーム競技か

その他の比較ではどの項目でも偏差値の伸びが良かった群の方が学業成績に関する能力等の平均値が大きかった。また、部活全体のチーム競技かどうか、運動部のチーム競技かどうかについても学業成績に関する能力等について調べ、比較したがどの項目もほとんど差が無く学業成績の伸びの差もほとんど無かったことから省略してある。

5. 考察

表8～表10の三つの比較でどの比較でも学業成績(偏差値)の伸びが大きい群のほうが、はっきりと大きかった要素は生活習慣と学習時間であり、その値の大きさと4.1節の学業成績の伸びに関するデータからわかることをまとめると以下の二つである。改めて述べるが運動部のチーム競技かどうかの分類はほとんど差がなかったため、分類せず「運動部」としてのみ扱う。

1. 学業成績の伸びは部活動に最後まで部活動に所属していた人の方が大きく、部活動の中でその大きさは運動部、文化部のチーム競技、その他の文化部の順である。
2. 学業成績の伸びに寄与する要素で部活動に最後まで所属していた人の方が高かったのは、規則的な生活習慣と休日の学習時間の項目であり、これも部活動の中では、運動部、文化部のチーム競技、その他の文化部の順で高い。

そして、調査から明らかになったこの二つのことから考えられることとして以下の二つを挙げる。

1. 学業成績の伸びは部活動に最後まで所属していた人の方が大きい。部活動の中ではその活動が盛んであった部活動に所属していた人の方がその伸びが大きい。
2. 部活動で身につく学業成績の伸びに繋がるものは、規則的な生活習慣と学校に強制されなくても自学自習する能力である。その傾向も部活動の中ではその活動が盛んであった部活動に所属していた人の方が大きい。

また、部活動で身につく学業成績の伸びに繋がるものとして、規則的な生活習慣と学校に強制されなくても自学自習する能力を挙げたが、それらはどちらも、自分の気まますを抑え、または自分で立てた規範に従って、自分のことは自分でやっていくという自律の能力である。このことから部活動に所属していたことが学業成績の伸びに繋がる過程は、

部活動の所属→自律の能力の習得→規則的な生活習慣・自主的な学習→学業成績の伸び
というものではないかと推測することができる。

実際、今回の調査で部活の経験が今の学習の姿勢などに影響したものがあつたか意見を求めることもしたが、「部活のルールとしてやっていた規則的な生活が身につき部活引退後も朝早く起き、そしてその時間に勉強できるようになった。」という意見もあつた。

6. まとめ

今回、部活を最後まで続けた人の方が部活動に所属しなかった人や途中でやめた人より学業成績を伸ばせるのか、もし、部活動が学業成績にポジティブな影響を与えるなら、部活動

に所属していた人の学業成績に関するどのような能力を育んだのか、そして、それら学業成績の伸びや、部活動が育む学業成績に関する能力は、部活動の種類によって差はあるのかという問いの下で、高校三年生を対象としたアンケート調査を行い、その結果から考えられることとして二つ挙げた。改めて挙げると以下の二つである。

1. 学業成績の伸びは部活動に最後まで所属していた人の方が大きく、部活動の中ではその活動が盛んであった部活動に所属していた人の方がその伸びが大きい。
2. 部活動で身につく学業成績の伸びに繋がるものは、規則的な生活習慣と学校に強制されなくても自学自習する能力である。その傾向も部活動の中ではその活動が盛んであった部活動に所属していた人の方が大きい。

そして部活動に所属していたことが学業成績の伸びに繋がる過程は、

部活動の所属→自律の能力の習得→規則的な生活習慣・自主的な学習→学業成績の伸び
だという推測に至った。

今回行った調査の今後の課題としては2つある。一つ目が、部活動の数と種類についての問題である。活動が盛んで性質が運動部に近いと考えられる文化部の数が少なかった。それに加え今回の調査では過度に活動が盛んな部活動が無かった。もしそのような部活動があればさらに正確な研究に繋がるだろう。もう一つが今回の結論が逆の因果関係を持つ可能性が捨てきれないことである。部活動で自律の能力を身につけるのではなく、自律の能力がある人が部活動を続けられる可能性だ。前節で述べた今回調査を行った対象の生徒の意見から部活動で自律の能力が身についたことは推測出来るが、確実とは言えない。これについてはさらなる他の方法の調査が必要だろう。

今回の調査で部活動を最後まで続けることについての学業成績に関するメリットを明らかにしたが、今後の課題としても挙げたように、部活動の種類はさまざまであり、中学、高校、大学などによっても変わるため、全ての部活動に当てはまることはなかなか分からない。しかし、受験勉強のためという理由などですぐにやめるのは早計ではないだろうか。部活動を続けてみることで得られるものも必ずあるはずである。

[参考文献]

杉村健・清水益治(1988) 「中学生における学業成績と学習意欲の関係」『奈良教育大学教育研究所紀要』24, 45-51

スポーツ庁(2018) 「平成29年度運動部活動等に関する実態調査報告書」

(https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/06/12/1403173_2.pdf 2021年1月6日閲覧)

関朋昭・溝上慎一(2018) 「部活動は「チームで働く力」を本当に育むのか -全国規模のパネル調査を通して-」『紀要』12, 1-10

坪田佳子・廣部すみえ・市波和子(2010) 「入学時の成績と看護師国家試験成績との一考察」『新田塚医療福祉センター雑誌』7(1), 25-28

データからみる教育 校内活用版 家庭学習指導が学力の二極化を防ぐ 成績上位層の方が家庭

での学習時間が長い VIEW21[中学版] 2006.04 -ベネッセ教育総合研究所 (benesse.jp)
(https://berd.benesse.jp/berd/center/open/chu/view21/2006/04/c03data_01.html 2021
年1月6日閲覧)

福田一彦・浅岡章一(2012) 「大学生における睡眠覚醒リズムの問題点について」『江戸川大学紀
要』(22), 43-49

堀本ゆかり・丸山仁司・黒澤和生(2011) 「認知領域に影響を与える性格的特性分析」『理学療法
科学』26(4), 525-530